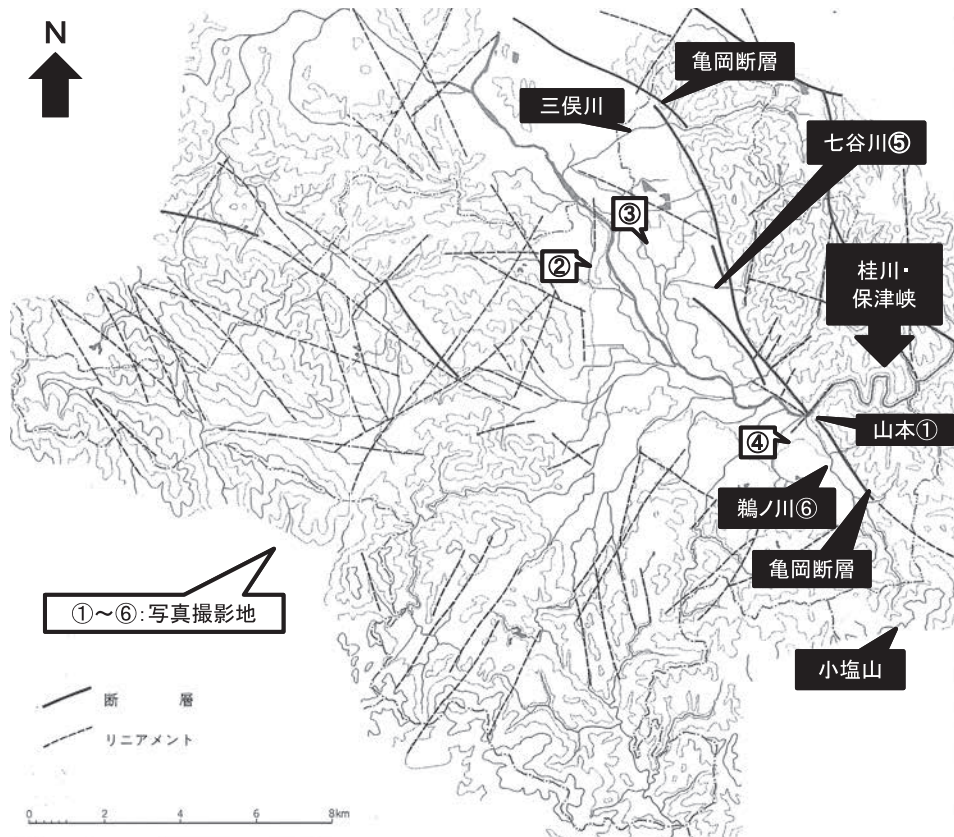


亀岡盆地鶉ノ川の文化的景観について

有井広幸

1. はじめに

亀岡市では平成22年から重要文化的景観選定に向け、市内の特徴的文化的景観調査を実施している。亀岡盆地は豊富な水資源に恵まれており、水に関わる文化的景観を軸に調査を進めてきている。中でも、亀岡市篠町山本集落では、「イケ」と呼ばれる庭先に設けられたため池的な水洗い場(写真①)が設けられており、特徴的な文化的景観となっている。一方、亀岡市内で一般的な水洗い場は、家の側を流れる用水を利用する数段の石段を設けていることが多かったようである(写真②～④)。集落内をめぐる用水は各近傍河川から採



第1図 亀岡断層と鶉ノ川位置図

取され、上・下流側の水田を潤しており、平地で広く発達している。

山本集落の近傍には桂川の支流である鵜ノ川が流れており、水が生活域に近い点で亀岡盆地の他集落と条件的に大きな差異はないと一見思えるが、山本集落では鵜ノ川から用水を利用する事になぜならなかったのでしょうか。この点について、鵜ノ川の特徴が山本集落の特徴的景観に大きな影響を及ぼしているのではないかということ、今回試論として提示したいと思う。

2. 亀岡盆地と山本集落

亀岡盆地は、京都市の西側に位置し都から老ノ坂を超えて山陰道を使う、旧丹波国の入口にあたる。盆地中央を貫流する桂川の水運を用いて、かつては建築資材である木材を筏で流し、薪炭などの燃料や米などの食料も供給する役割を果たして、桂川水運の役割が終わった今でも京都の生活に密接な関係を持っている。桂川は、人々の生活に役立つ一方で、下流域の京都市南西部に度々洪水を起こし、被害を与える川でもある。桂川のうち、亀岡盆地と京都盆地をつなぐ部分は、峡谷地形を成しており保津峡と呼ばれ、今では船を使った急流下りの観光地、名勝京都嵐山を含めて多数の観光客を集めている。

山本集落は、亀岡市篠町にあり100戸ほどの集落で、鵜ノ川右岸側の集落はこの集落のみである。ほとんどの人家は、唐櫃山地麓の緩斜面に階段状に石垣を積んで敷地を設けられており、一部の人家は鵜ノ川谷内最下流に建設された堤防よりも、高い部分に建てられている。集落の東側標高100m前後の高所部には、如意寺・宝泉寺・常福寺といった寺院が建てられており、北側の保津峡を見下ろす場所に桑田神社が鎮座しており、集落機能の中心がこの標高辺りにあるとあってよい。集落の南側には、斜面に沿うように棚田、鵜ノ川沿い(標高約80m)に水田が広がって、現在は減ったが集落の周囲には竹藪が多かったという。伝統的に桂川の水運に関わる人が多いとされ、今も保津川下りの船頭を務める人が



写真① 山本集落内の「イケ」



写真② 千代川町内



写真③ 馬路町内



写真④ 篠町内

いるということなど、亀岡市内でも特徴的な佇まいを残すことから、重要文化的景観候補地として調査が進められてきた。

3. 亀岡断層と鶉ノ川

亀岡盆地の周囲の山々からは桂川の支流が数多く流れ出しており、この盆地の特徴的な景観を作り出している。

亀岡盆地の北東側には、愛宕山から丹波高地へと続く山塊がそびえ立ち、麓には西山断層帯の主要活断層である亀岡断層が、南丹市八木町から桂川を跨ぎ京都市西京区へ約20kmに渡って続いている(第1図参照)^(注1)。亀岡断層の続くうちで、桂川より北側は、山塊の麓に扇状地形が複合した緩斜面から平地が広がり、山塊から流れ出る三俣川、七谷川では河川が運んだ土砂が大量に堆積して天井川化しており(写真⑤)、愛宕川付近でも扇状地形が発達している。付近には史跡丹波国分寺跡ほか多数の遺跡が分布しており、古代から現代にかけて、生活痕跡が豊富な場所である。

一方、保津川峡谷の入り口付近を挟んで南側は、桂川の支流鶉ノ川右岸沿いに亀岡断層が並行している^(注2)とされている。本来、桂川より北側に観られる土砂堆積と同様に、南側でも山塊側から土砂が平地側へ運ばれているはずである。しかし、唐櫃山地の裾部には山地側から流れ下る鶉ノ川支流の運んだ土砂が、鶉ノ川右岸にある程度確認できるくらいであるから、多量の土砂を鶉ノ川が下流へ運んだと考えないと現状地形と整合性をもたないこととなる。鶉ノ川はどのように多量の土砂を下流へと流し去ったのであろうか？

鶉ノ川は亀岡盆地に数ある桂川の支流のうち、京都市西京区小塩山(標高642m)から流れ出る長さ約6kmほどの小河川で、保津峡に入る直前の右岸側から本流に対しほぼ直角に合流する。国道9号線でも京都縦貫道でも、京都側から老ノ坂トンネルを潜り終えるとすぐ亀岡盆地を一望できるが、その時渡っている橋脚下を流れている河川である。流長は



写真⑤ 天井川化する七谷川を北西から望む

短い小河川ながらその谷は深く、谷幅は山本集落南側付近から王子付近約2.5kmにかけて幅約200m前後で直線的に伸びている。近年の鵜ノ川の流路は、流量も落ち着いて谷中央に兩岸を堤防で制御され、堤防脇の谷底平地に水田が整備されている。左岸側は断崖が明瞭にあり、国道9号線王子付近の鵜ノ川左岸の断崖(写真⑥：手前が国道9号線、奥上段が京都縦貫道路)は比高差約20mである。左岸側から流れ込む河川はなく、一方右岸側は山地側からの多くの支流によって恒常的崩落土砂の影響のため、砂防工事による現況保全が図られていることもあり、明瞭な断崖が観察困難となっている。左岸側の断崖が鵜ノ川の浸食によって形成されたことは明瞭であるから、本来は右岸側も同様の断崖があったと考えることが妥当であろう。通常浸食作用が強い場合の谷は、断面がV字形となるが、鵜ノ川の場合断崖を伴い断面は谷底平地幅の広いU字形となっている。また、亀岡盆地において、平地に接する位置で断崖を伴う河川は、鵜ノ川のみであり、浸食作用の特異性は明らかである。どのように浸食され、断崖が造られたのかを考えると、近年の地震や大雨で話題となった土砂ダム(天然ダム)の決壊によってダムの下流側に形成される例が参考になる。

地震等による土砂ダム(天然ダム)の形成例は、近年日本列島内の災害増加に伴い増加傾向にあり、その研究も進んできている。近年注目された例としては、平成16(2004)年新



写真⑥ 鵜ノ川谷内から国道9号線・京都縦貫道を南に望む

渦県中越地震による山古志村における土砂ダム(天然ダム)事例が多数発生し、その対策が急がれたことは記憶に新しい。また、地震以外でも平成23(2011)年台風12号の豪雨災害により、奈良県、和歌山県の各所で土砂災害が発生し、土砂ダムが形成されている。

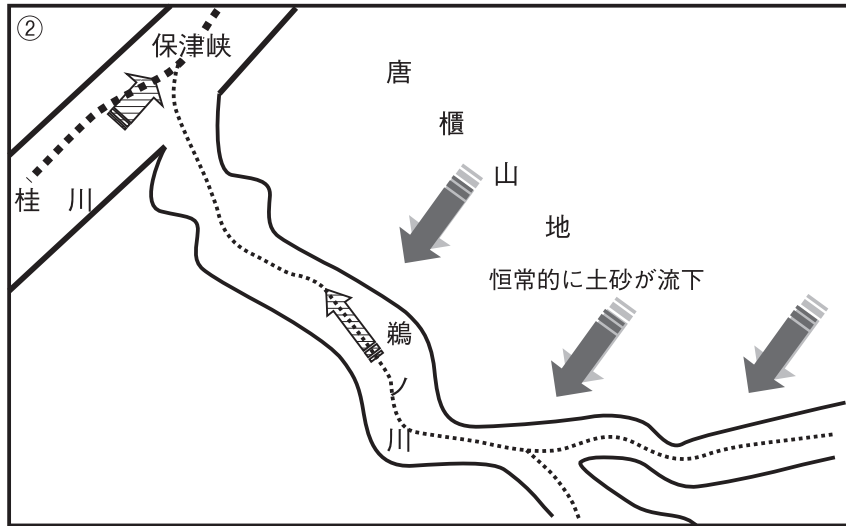
土砂ダムが形成されても必ず決壊するわけではないが、歴史的に最大規模の土砂ダム被害で知られているのは、信濃川最上流部、長野県南佐久郡小海町大月川で仁和3(887)年地震により八ヶ岳の山体が崩落し土砂ダムが形成されたのち決壊し、下流域に大規模な洪水被害を与えており、土砂ダム下流側の小海町八那池から佐久穂町にかけて、千曲川の兩岸に段丘崖が広く観察されている^(注3)。

このような事例と亀岡断層の位置とその影響から類推すると、鵜ノ川左岸の断崖は、右岸側から供給された多量の土砂が、大きな土石流となって下流へ流れ下ったときに形成されたと考えられるのではないかと。鵜ノ川の景観形成過程は、以下の通りと考えている。

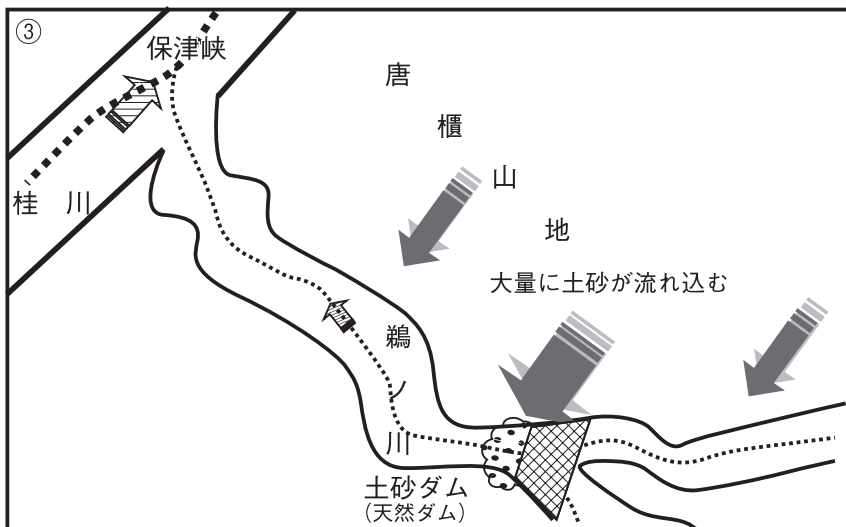
4. 鵜ノ川の景観形成過程

- ① 鵜ノ川は、現在の唐櫃山地の裾部に流れが固定されるまで、篠町一帯を扇状地とする河川であったと考えられ、現在の王子交差点付近からJ R馬堀駅方向へ左岸側の北に向かって緩やかに傾斜する平地を形成していた。

- ② 鵜ノ川右岸側山塊を水源とする支流が、恒常的に運搬する土砂を鵜ノ川との合流部分に堆積させ、この作用は現在も継続している。この堆積作用は、亀岡盆地内の桂川左岸にみられる、七谷川、三俣川が山塊から平地に出た部分に形成している扇状地や天井川の起因要件と同様である。



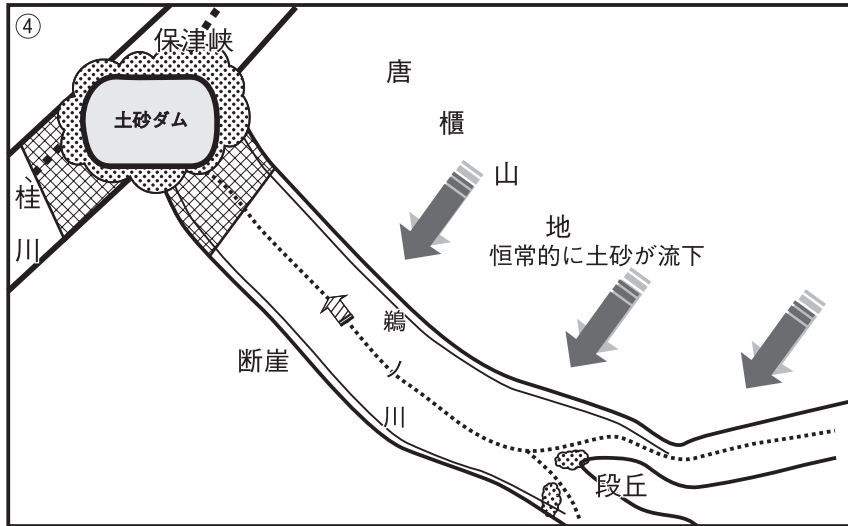
- ③ 亀岡断層や近傍活断層の動きなどの地震によって、鵜ノ川右岸の流動性を持った土砂が鵜ノ川へ崩落・堆積し、土砂ダム(天然ダム)を形成する。



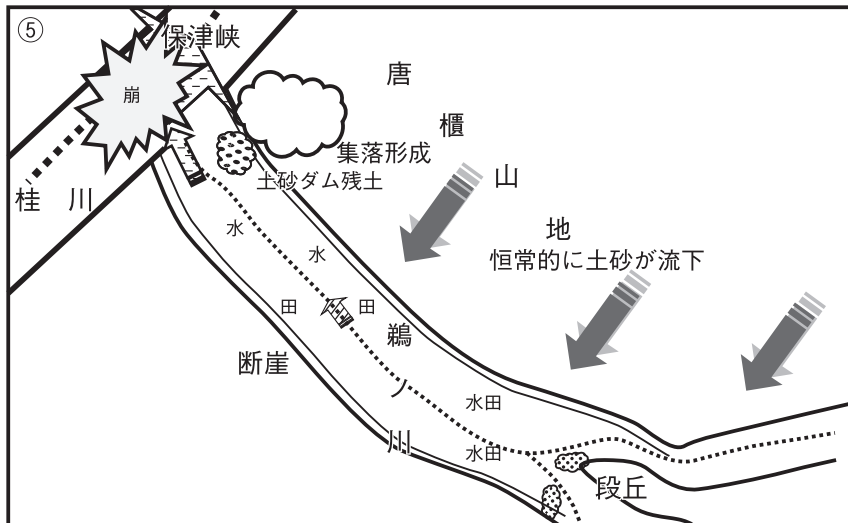
- ④ 堰き止められた水が土砂ダムを決壊させ、鵜ノ川兩岸の土砂を巻き込みながら直線的に桂川合流点へ多量の土砂とともに流れ落ちる。このとき左右兩岸は断崖が形

成される。旧ダム湖内堆積土の一部が残留し、段丘が谷内に形成される。

鵜ノ川から桂川へ流下した土砂は、合流点下流側の保津峡入り口部分が狭隘なため、再び土砂ダムを形成する。



- ⑤ 亀岡盆地に滞留した水が土砂ダムを決壊させ、下流へ土石流となって流れ下る。土砂ダムの残存土砂が鵜ノ川合流部右岸側に残り、後に山本集落の一部が形成され、鵜ノ川谷底には、河道部分以外に水田が整備される。



5. まとめ

山本集落の中心は鶴ノ川から比高差約20mの高所にあり、鶴ノ川の影響を避ける位置に営まれている。鶴ノ川からの用水利用は困難であるため「イケ」が多く利用され、南西向き斜面地に敷地が階段状に設けられているため、集落背後の山から滲み出てくる地下水を「イケ」に溜めて利用する生活になっている。

一方、山本集落の発達に伴い、一部人家が鶴ノ川右岸に形成された土砂ダムの残留土砂上に営まれた可能性が高い。

なお、桂川本流をせき止めた土砂ダム決壊の影響は、巨椋池の形成や京都盆地西・南部に大きな影響を与えてきた可能性があり、今後の検討としたい。

(ありい・ひろゆき = 当調査研究センター調査課課長)

注1 『新修亀岡市史』本文編第1巻 1997年 p50「第12図亀岡付近の断層とリニアメント」に加筆

注2 『新修亀岡市史』本文編第1巻 1997年 p35

注3 『歴史地震』第26号 2011年 p106~107 講演要旨「長野県中・北部で形成された巨大天然ダムの事例紹介－八ヶ岳大月川岩屑なだれと姫川・岩戸山の大規模地すべり－」財団法人砂防フロンティア整備推進機構 井上公夫